

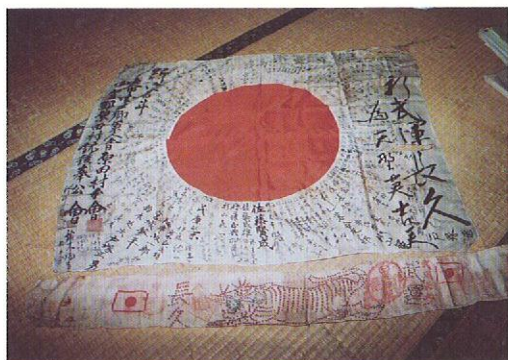
◆ 太平洋戦争へ突入

このころ、男子は20才になると身体検査を受け、合格すると軍隊に入りました。この制度を、徴兵制度ちようへいせいどといいます。

軍隊では、上官の命令は、たとえ間違っているとしても絶対に逆さからうことはできませんでした。

国のために死ぬことが名誉だと、教えられていた時代でした。

◆ 兵士の武運を願って



にっしやうき せんじんばり
日章旗と千人針



がいとろ ぬ
街頭でひとりひと針を縫う



しめっせいへいし
出征兵士の見送り(三熊野神社にて)

◆ 戦争は二度とあってはならないこと

あまの ひできち

天野英吉さん (大正8年生まれ 平島)

入隊の日、当時の原田村の村長からお祝いの言葉をもらい、村の人たちが見送ってくれました。私は一人前になれたような気がしてうれしくなり、お国のためにがんばろうと思いました。昭和17年11月にパプア・ニューギニアに上陸しました。赤道近くで、とても暑いところでした。最初は訓練をしていましたが、1年たってアメリカ軍の攻撃が激こうげきしくなり、食料などを積んだ日本からの船もほとんど来なくなりました。飛行機の機関銃きかんじゆうでねらわれ、必死で逃げたこともあります。私は日本が恋こいしくて、家族、友達に会いたくてたまりませんでした。40日間、ジャングルの中を移動し続けたこともありました。移動中、マラリアという伝染病でんせんびやうで倒れてしまう兵隊もいました。病気で死にそうな人が水を欲ほしがり、自分が持っている水筒の水をあげようとしたのですが上官に止められました。また、病気で動けなくなってしまう兵隊が自分を殺してくれと上官にたのんでる姿すがたも見ました。多くの仲間がマラリアで死んでいきました。遺体を焼くと、煙で敵に発見けわりされてしまうので、土に埋めました。死亡した兵隊の小指せつだんの先を切断して、遺骨いこつのかわりに日本に送りました。

まもなく終戦の知らせが入りました。しばらくは武器を船に積んで沖へ捨てたり、またオーストラリア軍などの命令で家を建てたりもしました。

日本に上陸して、松や、杉などを目にした時、生きて日本に帰れたと実感し、本当にうれしくなりました。最もうれしかった思い出です。

戦争は本当に悲惨なものであり、二度とあってはならないことだと思います。



◆空襲への備え

1942年（昭和17年）、アメリカ軍機による日本本土への空襲が始まって以来、いっばんの家庭でも空襲に備える対策がとられました。



〈灯火管制のおおい〉
室内の明かりを
外へもらさないための
電灯をおおうカバー



〈名札〉
氏名、学校名、学年、住所
が書いてある。
〈防空頭巾〉
頭を保護する。



〈ラジオ〉
敵機の様子や避難勧告を聞く
が雑音が多くてよくわからない。



〈ガラスに紙をはる〉
爆風でガラスが飛び散るのを防ぐ
ために、すべてのガラスにはる。

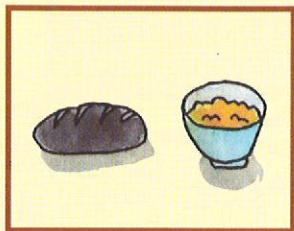
「青い目の人形」マーベル・ワレンちゃん (御前崎市立浜岡北小学校)

この人形は、1927年（昭和2年）に日米の親善を願ってアメリカから当時の朝比奈小学校に贈られたものです。戦争が激しくなると、「敵国のものだ。燃やしてしまえ。」という命令が出され、この小学校でも、校長先生が女性用務員に燃やすように指示しました。しかし彼女は、「とても燃やすことはできない。」と、息子と二人きりで人形をケースごと新聞紙などで包み、学校のやぎ小屋の干しわらの中に隠しました。こうして、この人形は戦争をくぐり抜けることができました。

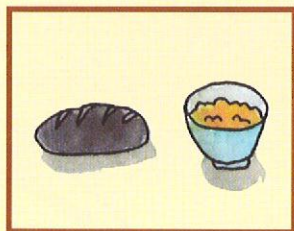
人々の平和への願い
や戦争の悲惨さを伝える
ために、今も大切に
保管されています。



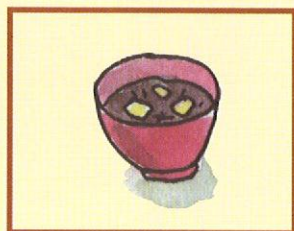
◆食事 (塩やしょうゆなどの調味料が配給制で十分手に入らないので、おかずは薄味でした。)



〈朝食〉
さつまいものつるを粉にして
蒸したパン、かぼちゃのスープ



〈昼食〉
さつまいものつるを粉にして
蒸したパン、かぼちゃのスープ



〈夕食〉
すいとん
米や魚は、めったに食べられない。



◆当時の子どもの様子

子どもは、少国民（年少の国民）と呼ばれ、勉強のほか
に縄ない、茶の実拾い、金属集め、戦争に行っている人へ
はげましの手紙を書いたりしました。

縄ない

農作業などに使ったりする縄をつくりました。

茶の実拾い

油をとるために茶の実を拾いました。

金属集め

戦争に使う金属が不足していたので、落ちてくるくぎなども
拾って出しました。

◆少年飛行兵をめざす訓練生



大日本飛行協会滑空訓練所（沖之須）にて

◆掛川市内で空襲の被害にあったところ

何が起きたかわからなかった。激しい機銃の音と車内に広がる悲鳴。「いすの下へ。」という男の人の絶叫で、座席下へすべりこむのがやっとだった。数分たったか、列車が止まったので、もう無我夢中で外へ転がり出た。機関士がやられて動かなくなった。立ち往生した辺りは、底なしの泥田。危なくて、女衆には田植えもさせないぐらいの深い所で、飛び降りた乗客がひざほどに伸びた苗をつかんで助けを求めていた。

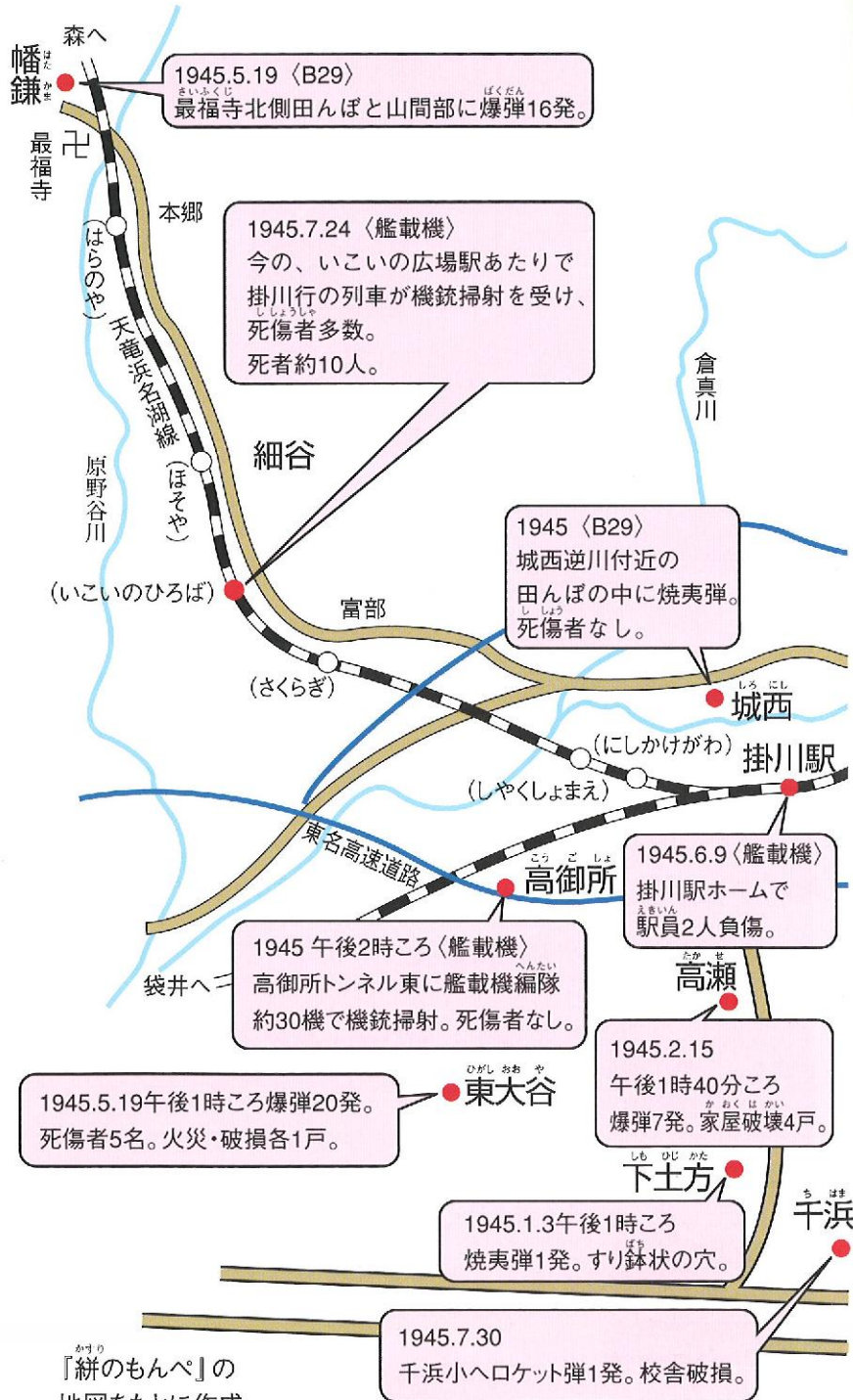
戦争の回想（静岡新聞より）



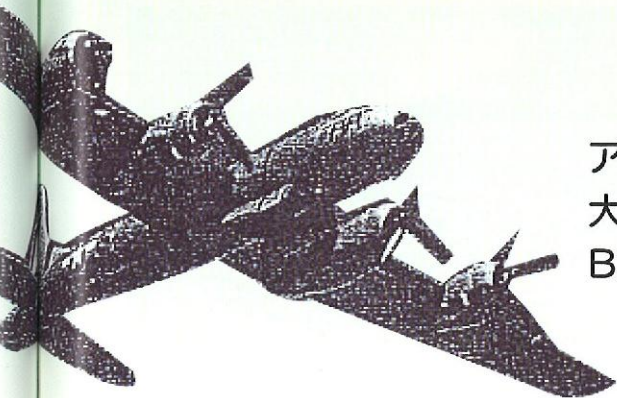
地下工場の跡（遊家）

これは、陸軍航空機エンジンを生産していた中島飛行機浜松工場が、そかい先として遊家・本郷地区につくった工場の跡です。激しい空襲をさけるためでした。そのため工場は山の中を掘って、地下工場としてつくられましたが、ほぼ完成した時に、戦争は終わりました。

掛川への空襲

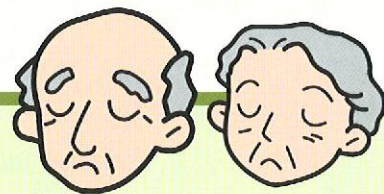
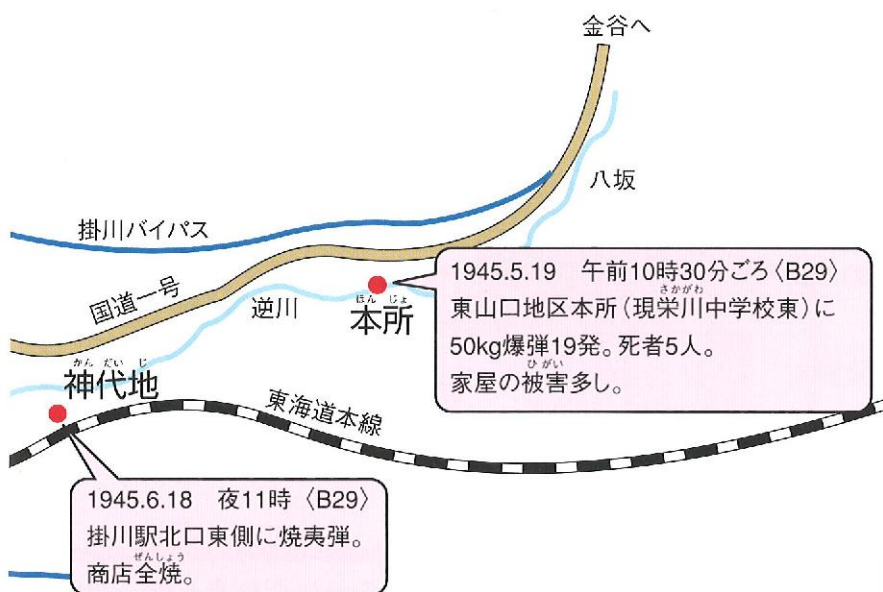


「緋のもんぺ」の地図をもとに作成



アメリカ軍
大型爆げき機
B29による空襲

- 爆弾 = 破壊・殺傷を目的とした爆弾
- 機銃掃射 = 機関銃で連続して広範囲に射撃すること
- 焼夷弾 = 建物などを焼くことを目的とした爆弾
- 艦載機 = 航空母艦に載せられた航空機



昭和20年5月19日、この日は朝から空はなまり色の厚い雲におおわれ、何も見えない日でした。午前10時半ごろでした。突然、本所地区中心に「ザーザー」という激しい音とともに、爆弾が19発も落とされました。田畑にいた人も、お茶をмонでいた人も、子どもの安否を気づかう人もみんな右往左往するばかりでした。5人の尊い命が失われ、悲しみと恐ろしさで身のふるえが止まりませんでした。私は爆弾の破片を受けた悲さんな姿を今も鮮明に目の奥によみがえらせることができます。

（『緋のものべ』泉 まつさんの記述より）

調べてみよう

戦争中の暮らしがおじいさんやおばあさんに語りつがれています。



爆撃による火事に備えて防空訓練をする人々
（東山口村海老名 昭和20年）

敗戦と戦後の新しい社会

◆敗戦間近に起きた^{とうなんかいじしん}東南海地震

アメリカやイギリスなどの連合軍との戦争は、はじめは日本が優勢でしたが、1942年（昭和17年）のミッドウェー海戦から負け始めました。戦争の被害が拡大していた1944年（昭和19年）12月、この地域一帯に大地震がありました。掛川も大きな被害を受けましたが、戦争中のためほとんど報道されることはありませんでした。

1945年（昭和20年）の広島・長崎への原子爆弾の投下により、ポツダム宣言を受け入れ、日本は無条件降伏をしました。



東南海地震で倒壊した家屋（西町 昭和19年）

◆掛川の農地改革

地主から農民へ農地を解放しようという政策が、掛川では1947年（昭和22年）から行われました。これにより、掛川でも、田畑を借りて耕作する小作農の農地の割合が減り、自作農が増えました。

自作農になった農民は、自分の土地から得た収穫がすべて自分の収入に結びつくようになったので、意欲が高まりました。

農地改革は、農産物の増産や農業技術が発展する基礎になりました。



農地改革のパフレット

◆国道一号の完成

1950年（昭和25年）8月、アメリカ軍の援助により国道一号の工事が行われることになりました。掛川駅前を通る案もありましたが、現在の道に決まりました。昭和25年8月に着工し、26年の6月に完成できたのは、延べ62,000人の労働力とともに、ダンプトラック、パワーシャベル、ブルドーザーという機械力が導入されたことによります。

国道一号は、このころまだ砂利道でした。

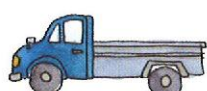
昭和27年掛川町内の自動車保有台数



乗用車 8台



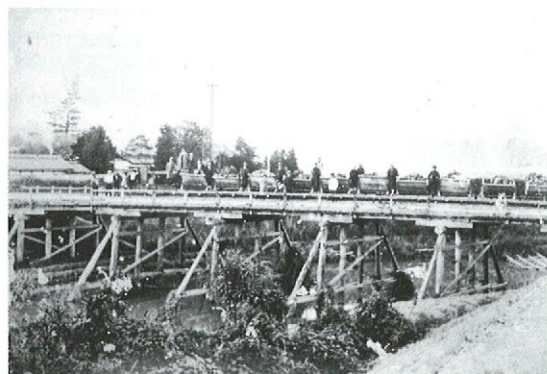
バス 7台



トラック 47台

小型四輪 17台

オート三輪 97台



国道一号大池橋の工事風景

◆新しい教育

1945年（昭和20年）の敗戦により、教育も大きく変わっていきます。

連合国総司令部（GHQ）の最初の指導では、

- 1 行事などにおける神道の禁止
- 2 修身・国史・地理の授業の停止
- 3 教練・武道の禁止



墨ぬり教科書

などがありました。

子どもたちは、先生の指示に従って、教科書に墨をぬったり修正しながらこれまでとはちがう授業を受けました。

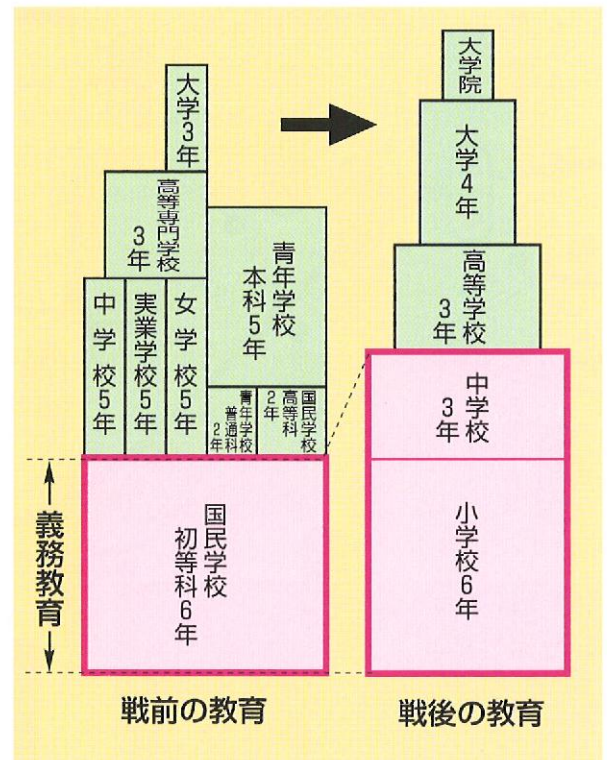
1947年（昭和22年）に、小学校・中学校を義務教育とする「学校教育法」ができました。義務教育が9年になり、小学校を卒業したあと、中学校に進み、男女共学となりました。ローマ字教育が始められ、当用漢字や現代かなづかいが採用されました。この時の体制が、現在の学校教育の姿を形づくっています。地理、歴史の授業も再開されました。

1948年（昭和23年）には教育委員会ができ、新しい教育制度による高等学校がこの年に始まりました。

中学へ無試験で進学でき、
男女共学になったのは
昭和22年からです。

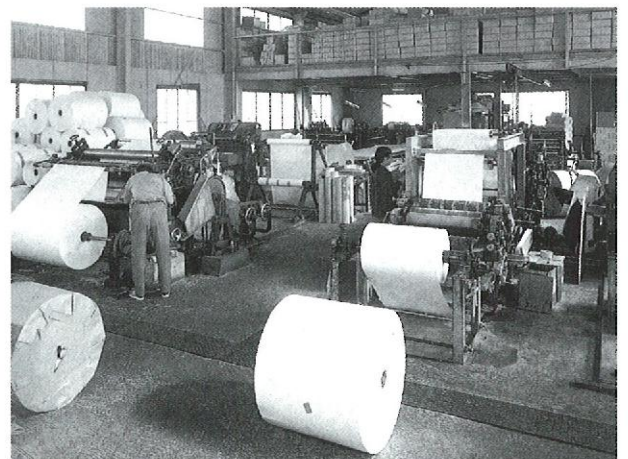


学校給食が始まりました。（第一小 昭和31年）



◆掛川の産業復興と朝鮮戦争

1950年（昭和25年）朝鮮半島で、大韓民国と北朝鮮（朝鮮民主主義人民共和国）の戦争が起こりました。敗戦によっておとろえていた日本の産業は、この戦争を境に発展し始めます。静岡県西部地区では、綿紡績や織物業に加えて楽器やオートバイなどの機械・自動車産業が発展し、今までにない好景気の時代になっていきました。市内でも、楽器、オートバイ関連の工場などが作られ機械化がすすみました。



大須賀地区紙経木の工場（写真提供 遠興）